

News Letter

■2011年11月17日発行 ■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

高等教育創造開発センターでは昨年度より、本学のPBL教育の広がりと向上のため、「PBL教育支援プログラム」として、授業科目でPBLを導入する教員に、教材開発費・授業開発費を支援する事業を行っています。

昨年度は7件が採択されました。本号から、採択課題の成果報告をシリーズにて掲載します。第1弾は教育学部、岡野昇先生の「体育教材研究」におけるPBL教育の実践報告です。

2011年度開講「PBL教育支援プログラム」成果報告(1)

「学びの履歴カード」と「授業通信」を活用したPBL教育の展開

導入した科目の概要及び学生の到達目標

対象授業は、2010 年度教育学部で開講された専門教育科目の「体育教材研究」である。授業の目的は、私たちがいつの間にか、そういうものだと思いついていて、思考の枠組みをくずしながら、小学校体育のあり方について探究することである。学生の到達目標は「対話的实践に基づく自己形成」と「小学校体育の授業を行うことへの自覚と責任」であり、評価の観点は「問題把握の深さ」と「授業を通じた自己の脱構築性」である。全学習内容(テーマ)は、次の通りである。

- 1.体育観への気づき—教員採用試験問題
- 2.自己の体育観を引き出す—個体主義と関係主義
- 3.体育観形成における問題点—「問題」のとらえ方
- 4.学習指導要領(小学校体育科)の読み取り—カリキュラム—メーカーとしての教師
- 5.子どもの体を育てるということ—相互主体論
- 6.教材研究の視点—運動の中心のおもしろさ
- 7.新しい視点に立った学習内容①—器械運動系
- 8.新しい視点に立った学習内容②—ボール運動系
- 9.新しい視点に立った学習内容③—陸上運動系
- 10.新しい視点に立った学習内容④—水泳系
- 11.新しい視点に立った学習内容⑤—表現運動系
- 12.新しい視点に立った学習内容⑥—体づくり運動・保健
- 13.教育実習生の授業観察(VTR)
- 14.体育の単元計画
- 15.自らの学びを振り返る

PBLを導入した意図・目的

本授業では、「学び(対話的实践に基づく自己形成)」を大切にしている。ここでいう「学び」とは、テーマとの対話、他者との対話、自己との対話の3つの対話的实践が一体となった一つの活動システムのことである。このシステムを機能させていくためには、「学びの履歴カード」と「授業通信」の活用が欠かせないものとなっている。本稿では、その活用展開例について報告を行う。

内容

「学びの履歴カード」とは、本時の授業で提示されたテーマについて、450字程度で自己省察するカードであり、授業終了翌日までに提出が課せられているものである。記述内容は、単なる授業内容の記録や感想、意見ではなく、テーマについて再度調べ直し、考察し直し、自分ならどうするかという「自分自身を綴る」ことが強く求められる。なお、提出されたカードはすべて熟読し、問い質すようなコメントを入れるようにしている。

「授業通信」とは、「学びの履歴カード」に記述された内容を中心に編成したものである。テーマにおける「問題把握の深さ」と「自己の脱構築性」が認められる7名程度の記述を取り上げ、個人の思考を他者の思考と交流させ、それを全体の議論へと結びつけるための学習資源として位置づけている(次頁)。

体育教材研究 授業通信 No.8 2010.12.9

■テーマ 最近の「学びの履歴」で気になることを挙げてみる。一つは、「教師は…」から始まる記述である。どこか他人事で「自分とは関係がない」というように聞こえてくる。この授業の大前提を思い出してほしい。二つ目は、「無りを感じる」という記述である。確かに毎回知らないことが登場するたびに、何も知らなかった自分が浮き彫りにされるのだから仕方がない。しかし、学びは既知から未知への旅だ。「わからない」を愉しむことができるかが問われている。三つ目は、配布物(授業通信、事前課題、前回のコメント、配布資料)を再度熟読してから、「学びの履歴」に向かっていける人という人との二分化だ。その違いは問題把握の深さとして記述内容に現れている。

①バスケットボールの距離について調べると、人々の距離をつぶすためにつくられた。距離をえがくようにして投げられることを意図していた。当初のルールではドリブルはなく…

②ソフトボールは「野球」と呼ばれる。昔は野球を「打球」に「ごっこ」と呼んでいたそう。

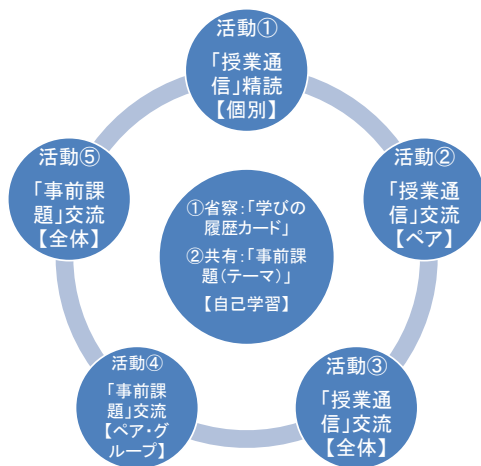
③ゴール型の陣取り合戦で足を使うのはサッカーならば、手を使うのはラグビーであると考えた。

【授業通信の一例】

1時間の授業の流れは、おおよそ次の通りである。

活動①「授業通信」の精読(個別学習・5分程度)→活動②「授業通信」から読み取った意見交流(ペア学習・10分程度)→活動③「授業通信」から読み取った意見交流(全体学習・30分程度)→活動④「事前課題」の交流(ペア・少人数グループ学習・10分程度)→活動⑤「事前課題」の全体交流と問題の洗い出し(全体学習・35分程度)の順で行われる。この流れは、授業前半が「学びの履歴カード」を中心に編集された「授業通信」に基づきながら前時の授業テーマについて再構成する時間として位置づいており、授業後半は「事前課題」に基づきながら本時の授業テーマについて意見交流する時間として位置づいている。すなわち、一つのテーマを2回の授業にわたり取り上げていることになり、その間を自己学習(「学びの履歴カード」の作成と「事前課

題」への取組)でつないでいることになる。



成果と今後の課題

「授業改善のためのアンケート」における「総合的に判断して、この授業に満足できた」は4.5以上の評価を得ており、概ね授業の満足度は良好であるものと思われる。自由記述からは、「学びの履歴カードで毎回自分を振り返ることができる」「毎回の学びの履歴での振り返りはとても大変でしたが、自分の考えを整理し、考え直すきっかけとなった」「学びの履歴に対するコメントは、一言だけでも考えるきっかけとなる」など、「学びの履歴カード」が自己省察する場として機能していたことが推察できる。また、「授業通信は自分の意見とは違った視点や意見を共有できるし、新しい知識を得られるときもある」「授業通信による話し合いも自分の成長となった」など、個人の思考と他者の思考を擦り合わせ、個人の思考を再構成する学習資源としての役割を果たしていたものと考えられる。

一方では、「他の授業の課題の量を考えると、この授業の課題は莫大な量があると思うので、多少量を減らしてほしい」といった意見もあげられ、授業外の自己学習における課題の絞り込みと厳選が今後の課題としてあげられる。

教育学部 岡野 昇

* 次号は教育学部 南 学先生の成果報告を掲載します。